

自然博物館

ニュース

A·MUSEUM

vol.7



ア・ミュージアム

ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



牛乳パックで再生紙作り

—サンデーサイエンス(2月)—



博物館活動へのボランティアの協力

当館では毎週日曜日、1階のディスカバリー・プレイスにあるスタディルームで『サンデーサイエンス—楽しい体験教室—』を実施しています。これは自然をテーマにした観察や実験、工作などを通して、楽しみながら発見する喜びを味わい、自然についての関心を深めていただこうとするものです。

2月のテーマは『紙を作ってみよう』でした。使用済みの牛乳パックを利用して紙料液を作り、紙すきの用具を使って紙をすきます。これを水切りしてアイロンをかけて出来上がり。牛乳パックを使っての再生紙作りは初めてという方がほとんどで、参加された皆さんには、紙作りに真剣に取り組んでいました。

ところで、増え続ける包装ゴミの減量と再利用を図る「容器包装リサイクル法」が昨年6月に制定され、来年4月からの本格的な実施まであと一年。身近なゴミ問題に対する関心と、限りある資源を有効に活用するリサイクルに対して、今後一層、意識の高揚を図っていく必要があるように思われます。

当館での教育普及活動が、来館される皆様方に、生活の中の身近な問題から地球環境問題についてさらに考えていただくための一助となればと考えております。

第6回企画展

鉱物たちの素顔

—その魅力をさぐる—
Searching for the Wonders of Minerals

1996年4月13日(土)～6月2日(日)

皆さんに『鉱物』という言葉からどのようなイメージを抱かれないのでしょうか。冷たく、なんとなく薄暗く、私たちの日常からは縁遠い存在のように感じる人が多いようです。しかし実際には、現代の私たちの生活に深く根ざし、現代文明を陰で支える隠れた顔も持っているのです。そして私たちは無意識のうちに鉱物に触れ、美しさを堪能し、親しみを持って活用しているのです。

今回の企画展では、身近な存在でありながらあまり省みられることのなかった『鉱物たち』の活躍する姿をさまざまな切り口で紹介します。展示では、まずははじめに、巨大な鉱物のありのままの姿に触れていただきます。次に“部屋の中の鉱物”では私たちの生活空間をふりかえり身近にある鉱物たちの顔を覗いてみましょう。鉱物は私たちの日常においても常に意外な顔を覗かせています。一方、“輝きの中の鉱物”では、鉱物の魅力的な表情を見るすることができます。また、“人の手による鉱物”では鉱物の人為的応用と未来への展望について紹介します。



ペリドット

ところで、鉱物は不变不動という感がありますが、実際は結晶が“成長”してできたものです。“結晶の成長と個性”“鉱物のふしげ”においては、鉱物の内面的で知られざる顔が見られるでしょう。

鉱物は世界で4,000種類以上知られています。“茨城の鉱物”“南部・小室コレクション”では、いろいろな場所や環境下でできた様々な鉱物を紹介します。

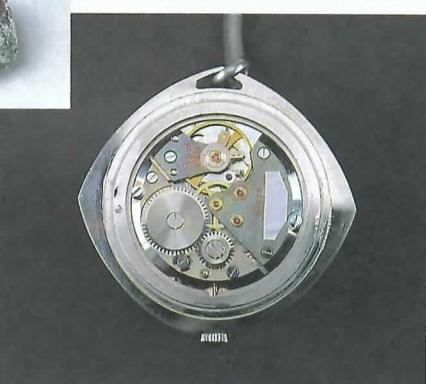
鉱物——これらは個々に様々な色・形・性質を持っています。そして私たちは鉱物を利用することによって現代生活を送っています。鉱物たちの持つ様々な顔——あなたはどのような顔が『鉱物たちの素顔』であると感じられるのでしょうか。



上：紫水晶

左：ルビー原石

下：懐中時計の軸受けに使われているルビー



■展示室ご案内



展示内容

- 1 鉱物のすがた
- 2 あけぼのから現代ヘーヒトとのかかわりー
- 3 部屋の中の鉱物
- 4 人の手による鉱物ー人工合成ー
- 5 輝きの中の鉱物ー宝飾鉱物ー
- 6 鉱物の成長と個性
- 7 鉱物のふしげ
- 8 茨城の鉱物
- 9 南部・小室コレクション

●開館時間 9時30分～17時
(入館は16時30分まで)

●休館日 毎週月曜日
但し、月曜日が祝日の場合は、翌火曜日が休館となります。

●入館料 小・中学生 140円(70円)
高校・大学生 420円(280円)

一般 700円(560円)

※()内は20名以上の団体料金

研究ノート●菅生沼および周辺の自然(6)

このシリーズ(3)で、約13万年前から現在にいたる菅生沼周辺の大地の生いたちについて紹介しました。その後、菅生沼ふれあい橋建設や飯沼川ふるさとの川モニタリング事業に伴うボーリング調査資料を茨城県境土木事務所よりご提供いただき、分析を進めたところ最終氷期以降の菅生沼の生いたちについていくつかの新しいことがわかったので、今回はその紹介をします。

1 菅生沼の地下に残る最終氷期の谷の跡 (菅生沼の原型)

菅生沼ふれあい橋の地下約10m付近には、約2万年前最盛期を迎えた最終氷期に形成された谷の跡が残っています。下の図は、その断面図で、博物館側がやや浅く、ゆるい起伏をもちながらあすなろの里側へ深くなっています。菅生沼南東部のボーリング調査では深さ17m付近に谷の延長部が確認されています。これだ

けの資料では断定はできませんが、当時、この付近は険しい地形であったと思われます。

この谷は、利根川低地へと
続き、守谷町付近で25m、藤
代町付近で40m、河内村付近
で50m、潮来町付近で60mと
その深さを増してゆき、現在
よりはるか沖合にあった海岸
で太平洋へ注いでいたようで
す。(1983・遠藤・他)

最終氷期の最盛期であった約2万年前頃の海水面は、気候の寒冷化のため現在より80mも低くかったと考えられています。すると、当博物館のたっている台地は、海拔100m程もあったことになります。

2 花粉化石、珪藻化石からみた最終氷期以後の菅生沼の移り変わり

菅生沼南東部のボーリング試料の花粉化石や珪藻化石から最終氷期以後菅生沼には淡水→海水→再び淡水の3つの時代の移り変りがあったと考えられます。

下部には、オーラコセイラ属 (*Aulacoseira sp.*) やゴンフォネマ アキュミナータム (*Gomphonema acuminatum*) などの淡水にすむ珪藻が多く、14m付近からタラシオシラ エクセントリカ (*Thalassiosira eccentrica*) コッコネイス スクテラム (*Cocconeis scutellum*) 等の海水にすむ珪藻が多くなります。このことから、14m付近で沼か川あるいは湿地であったところに海が進入してきましたと考えられ

ます。また、もう少し上位の12m付近まで、現在よりもやや寒冷な気候で生育するモミ、ツガ、ブナ等の花粉化石が産出していることから、この付近まで氷河時代の名残があったものと考えられます。その後は、海にすむ珪藻がほとんどで、花粉も特に寒冷な気候を示すものは産出していません。この海が、6千年前に最大に広がった縄文の海にあたり、周辺では、縄文時代前期の人々が自然の恵みのもと豊かな生活を営んでいたものと思われます。4～6m付近で淡水にすむ珪藻が再び産出し始めているので、この時期は海が退き、川か沼に移り変わった縄文時代中期にあたる、と考えられます。また、モミの花粉も産出しているので気候もやや寒くなったと思われます。さらに、3m付近で池や沼で生育するアザサが産出しているので、この付近ですでにあまり流れの強くない沼が成立していたことを示唆しています。

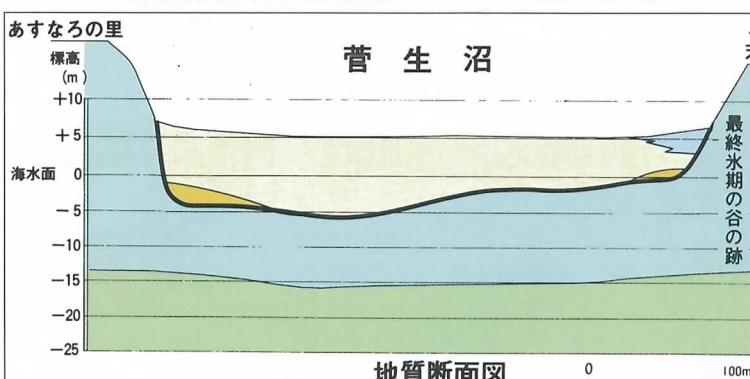
花粉化石及び珪藻化石の同定は、それぞれ堀内順治氏（東京学芸大学付属大泉中学校）、芳賀正和氏（千葉大学）にお世話をになりました。（資料課：菅谷）

菅生沼南東部のボーリング試料中の花粉化石と珪藻化石

ボーリングに関する試料			花粉化石		珪藻化石		環境の移り変わり
深度(1)	柱状図	土質区分	温帯要素	冷温帯要素	海水の要素	淡水の要素	
1	柱状図 シルト 有機質シルト	土質区分 重 調 覆 暗 黒	草根多い 粘土質 貝殻片を 含む 貝殻片を 含む 貝殻片を 含む 黒灰色と なる				
2			○ ○ ○	● ○			
3			○ ○ ○ ○	● ○			
4			○ ○ ○ ○		■		
5			○ ○ ○ ○	● ●	■		
6			○ ○ ○		■		
7			○ ○ ○ ○	●			
8			○ ○ ○				
9			○ ○ ○				
10			○ ○ ○ ○	●			
11			○ ○ ○ ○	● ● ● ●			
12			○ ○ ○ ○	●			
13			○ ○ ○ ○	●			
14			○ ○ ○ ○	●	■		
15			○ ○ ○ ○	● ●			
16	柱状図 シルト 中砂 シルト 細砂	土質区分 重 調 覆 暗 黒					湖沼又は河川下(微化) 海水化
17							
18							

*花粉化石の○●◎は、それぞれの産出頻度を示します
◎は、淡水に生息する種類です。

(ボーリング試料提供 菊城環境土木事務所)



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館

■ 分解質及び非分解質の腐植物を多量に含むシルトの沖積層。

最終氷期終了後、海進時の海やその後の沼になってから現在に至るまでの堆積物。水を多く含むシルトで、上部は腐植物を多量に含みます。堆積層。

最終氷期終了後の初期の堆積物。細粒～中粒の砂からなり
細礫を混入する。

 12万年前前後の下末吉海進時に古東京湾で堆積した地層（成田層）。大部分はシルトで貝の化石等を含む。

 海成の堆積物で成田層の下位にあたる地層。細井粒～中粒の砂からなる。

凡例

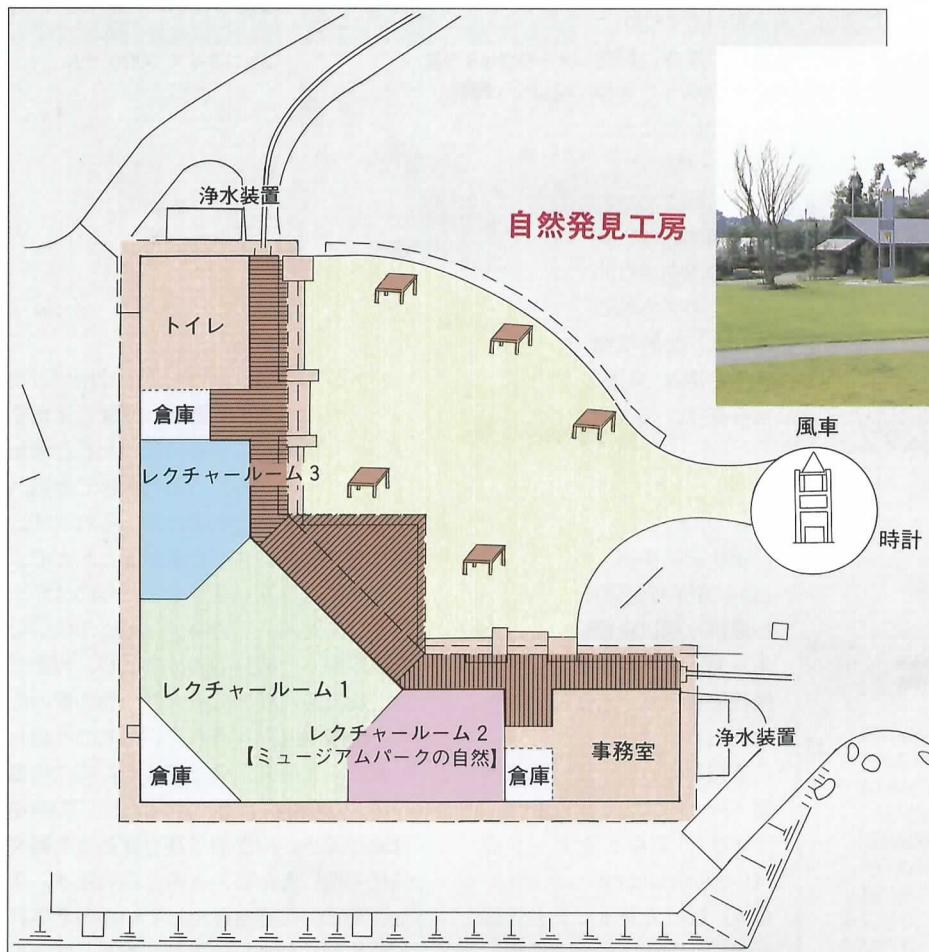
展示室紹介●自然発見工房

自然発見工房は、敷地南側の台地に位置し、観察や創作活動などのいろいろな野外活動の拠点として機能しています。

自然の中で観察する方法を尋ねたり、観察した結果を確かめ合ったり、こどもたちの自由な創作活動の場として、あるいはいろいろな発表の場として活気にあふれています。ここでは双眼鏡やルーペなどの観察用具の無料貸出も行っています。

また、この建物は、ソーラーエネルギーを応用して温水を作り出したり、風車を利用して発電したり、雨水を浄化貯水する装置等を取り入れたエコハウス（環境共生住宅）もあります。

ミュージアムパークの野外や隣接する菅生沼の豊かな自然を観察するために、また生涯学習の場として大いにご活用下さい。



【浄水装置】

地元で漬物樽に使われていた大きな樽を利用し雨水を蓄える水がめとして使っています。この雨水はろ過器を通してきれいな水に変わります。夏には工房の屋根に散布し室内の気温上昇も防ぎます。



【ミュージアムパークの自然の展示風景】

ミュージアムパーク茨城県自然博物館の野外および菅生沼に生活する生きた動物や植物、地層・岩石・化石、自然現象等について展示しています。

また、肉眼では見ることが出来ないミクロの世界についても顕微鏡を用いて観察することもできます。



【講座】

自然教室、観察会などの活動やその他の研修の場としても利用できます。



【受付・案内】

ここでは、野外施設の案内や観察器具の貸出のほか、自然についての質問にもお答えしています。



【風車と電圧計】

太陽の広場には、風の力をを利用して発電できる風車があります。この風車の発電量は発見工房内に表示され、利用することもできます。



歳時記●足あとウォッキング

春が近付き、冬型の気圧配置がゆるむころ、太平洋側に春の雪が降ることがあります。雪が降り積もると、ふだん見慣れた自宅近くの景色も、何か遠い雪国にでも来たような錯覚をおこし、家の中でじっとしているのがもったいなく思えてきます。

そんな時、雪道を散歩しながら、動物の足あとウォッキングをしてみましょう。

今年1月20日にも、県内で積雪が記録されました。その翌日の朝、博物館の園内を歩いてみると、真っ白な雪原で様々な動物の足跡が観察できました。

上の写真はノウサギの足跡です。ノウサギは、前足に比べ後足が大きく、また、後ろ足を前足の前に歩いて走るため、その足跡はたいへん特徴的で、簡単に見分けがけられます。

ノウサギ以外にはイヌやネコの足跡がほとんどでしたが、足跡を追って行くと、みんなフェンスの下の同じ隙間から出入りしているようでした。

ノウサギやタヌキなどの動物たちは、人を避けて暮らしているため主に夜活動

し、その姿を直接みかける機会はほとんどありません。しかし、足跡を調べれば、そこでどんな動物が生活しているかがわかります。足跡の大きさや形、その配置などから動物の種類を見分けることができるからです。

雪の日だけではなく、地面が柔らかくなった場所があればいつでも足跡ウォッキングはできます。注意して見ると、意外に皆さんの身近な所で動物たちが頑張って生きている証拠が見つかるかもしれませんよ。

(教育課：栗栖)



ノウサギの足跡
(手前から奥へ走った跡)
右：フェンスの下をくぐる足跡



収蔵品紹介●コウボウフデ *Battarrea japonica* (Kawam.) Otani

一般に“キノコ”といいますと傘形のものを思い浮べますが、このコウボウフデはキノコのなかでも子実体(傘の部分)が殻で覆われその内部で胞子を形成する腹菌類に属します。その地味な色合いやみすぼらしい風体は、使いこんで穂先のされた筆を思わせます。ところがこのコウボウフデ、全国的には稀な種で、ほん

の数県からの報告しかないように見えます。本種は昭和9年に初めて福島県で採集されました。数年後、その採集地にほど近い茨城県久慈郡でも見つかり、その後、県内の数箇所で確認されています。県内では、コナラを主とするやや若い二次林の、おおむね西側斜面に発生します。幼菌のうちは、黄色味をおびた卵形で地中にありますが、成熟すると青灰色でこん棒状の柄を地上に出し、その頭部がフェルト状に崩壊し粉化してゆきます。こうして胞子をまき散らす訳ですが、これを顕微鏡で見ると、球形で表面に多数の凹凸があることがわかります。

この標本は、昭和60年に茨城生物の会の平井信秀氏が新しい発生地として報告した高萩市で昨年、採集したものです。元来のキノコ標本は乾燥のみのため、著しく縮んで実物とは大部違ってしまうのが欠点でした。ところが、凍結乾燥法(凍結標本を真空中に置くことで水分を蒸発させる)で作成すると生菌とほぼ変わりなく出来上がります。

さて、この珍しいコウボウフデは、今年の秋に第8回企画展“キノコ展”で展示紹介したいと考えています。

(資料課：倉持)



凍結乾燥標本(95.10.20採集)



上：胞子
左：発生地(高萩市)

レポート○?!自然発見器?!

「自然発見器」、聞きなれない言葉だと思います。これは、遊びながら「自然のおもしろさ」を発見するという目的の元に、野外に造った独特的の建物や各種の珍しい装置に対して、当館が名付けたものです。

この自然発見器は、敷地南側の「夢の広場」「どんぐりの森」「水の広場」等に計24種が点々とあります。それらは、いろいろな虫や鳥やけものなどのまねをしてその生活や行動を疑似体験する「アニマル体験コーナー」と、太陽・風・音・土・水などの自然現象を楽しく観察できる「ふれあい学習コーナー」とに分けられます。

例えば、アニマル体験コーナーの「動物の巣」は大きなテントとネットでできた自然発見器です。テントの下には鳥の巣や虫の巣があります。小さな動物になったつもりでとびはねたり、巣にもぐったりしてみましょう。その隣には、リスの気持ちになっていろいろな高さから森の中が見られる「リスの目タワー」もあります。

ふれあい学習コーナーは、地中にうめられた管を伝って100m先の人と話のできる「100m伝言パイプ」、台に乗ると水が飛び出す「体重ふんすい」、穴の数で音が様々に変化する「風の音」など種類も豊富です。

博物館の館内展示については理解が難しい低年齢層の子供達でも、ここに来ると遊びの主人公、遊び発見の名人となります。この自然発見器による生まれて初めてのいろいろな遊び・体験に、子供達は心を踊らせ時の経つのも忘れて楽しんでおります。その無邪気に遊ぶ姿やパートの「子どもにとって遊びは学びである」という言葉から、自然発見器は、子どもの成長段階において実に貴重な体験の場であることを強く感じます。

これらの詳細な位置や内容については、野外セルフガイド「自然発見器」(無料配布)をご利用下さい。
(教育課:的場)



リスの目タワー



パラボラベンチ



霧ふんすい



水でっぽう



スポット○福岡堰の桜並木



福岡堰は、谷和原村の最北端にあり、元和年間に関東郡代伊奈忠治が鬼怒川・小貝川の分流域にある谷原領三萬石を干拓し、その用水源として寛永二年(1,625)に小貝川を萱洗堰で堰止め、1.6kmを導水しあんがい用水としたのが始まりです。現在の堰は、昭和46年にコンクリート可動堰に改築されたもので、用水は谷和原村、水海道市、伊奈町など全体で3,150haの農地を潤しています。

この桜並木は、大堰首頭口から導水路堤の両側に延長1.8kmにわたっており、茨城の観光百選に選ばれています。4月上旬から中旬にかけて約300本の吉野桜が咲き乱れ、桜吹雪が川面に舞散る情景は実に見事です。

コラム by director NAKAGAWA ○ネズミ

一月の末、県立婦人教育会館で研修講座が開かれ、私はテレビキャスターの見城美枝子さんと“女と男のトーク”というコーナーに出演しました。テーマは《地球環境時代を生きる》というもので、動物の話を中心にしながら人と自然の共生を考えようという企画です。

見城さんの話の中で、ひとつ心に残ったのはネズミの話です。今年はネズミ年ですが、どうしてもネズミが嫌いで姿を見ると「キャア！」と大声を上げてしまうほどだったそうです。

なぜか…?と考えると、どうやら女親がやはり



ネズミが嫌いで大騒ぎをする人だったことに気づきました。それ以来、見城さんは決して子どもたちの前ではネズミを見ても騒がず、平気な顔をよそおうように努力したそうです。

そして子供さんがハムスターやマウスを飼うようになったとき、「困ったな」と思っているながらも内心嬉しかったということです――。

トピックス◎(12月～2月)

自然博物館から火災発生 一消防避難訓練実施一 2月8日(木)

開館以来初めて、来館された皆さんと共に消防避難訓練を実施しました。

この日は、第5展示室の休憩室コーナーから火災が発生したという想定で、博物館の自衛消防組織の各役割ごとに火災発生の通報連絡、来館者の避難誘導、重要書類の搬出、けが人の救護などの訓練を行いました。

また、消火訓練では消火器を使った初期消火、消火栓からの放水を行い、さらに、西南広域消防本部のご協力をいただき、はしご車で建物に取り残された人の救出を行いました。

西南広域消防本部の署員の皆様、来館者の皆様には訓練にご協力をいただき誠にありがとうございました。



平成7年度移動博物館全日程終了

平成7年度の最後となる第5回移動博物館を県立下妻養護学校を会場に開催し、生徒、先生方など約330名の参加をいただきました。

この日は、子供たちの熱烈な歓迎を受け、館職員も期待に応えられるよう説明したり、対応にあたりました。また、石こうを使った化石のレプリカ作りや落ち葉のしおり作

1月24日(水)・25日(木)

りなどの体験コーナーでは、子供たちが楽しそうに、また一生懸命取り組む姿がみられ担当の館職員はたいへん満足そうでした。

来年度は、子供たちの体験学習ということに重点をおき、主に学校や施設での開催を計画しております。子供たちの笑顔を糧にがんばって参りたいと思います。

第1回押し花絵コンクール結果発表

12月9日～26日の期間で押し花絵画コンクールを企画展示室で開催しました。

第1回目ということでどのような作品が応募されるか心配でしたが、予想をはるかに超える素晴らしい作品がたくさん集まり、大変盛況でした。入賞者は次のとおりです。なお、敬称は省略させていただきます。



「身近な自然」：最優秀賞 羽鳥つね子

【押し花絵画の部】

最優秀賞	羽鳥つね子
館長賞	須藤喜美子
	鈴木温子・幸子
副館長賞	平島 優花
	増田 晃子
優秀賞	山口八重子
	飯塚 文代
	伊藤カツ子
	染谷 幸子
	野本 静子

【押し花しおりの部】

館長賞	中村じゅん	松本 正弘	野村 聰史
	小林 由加	大沼 邦雄	松本 真一
	長谷川友梨	松本 裕子	小林とも子
	葛谷 信治		
副館長賞	大野 直輝	鈴木 穂穂	諫訪未香子
	宗 義尚	照沼 知美	鴨志田麻里
	富樫真梨菜	古谷 友美	鈴木 美穂
	小幡則子		
優秀賞	日置 達也	高橋 成和	柳岡 俊樹
	浅野かおり	遠藤明日香	染谷 亮子
	葛谷由美子	福田 哲夫	大関 渉
	島崎 誠		

審査の主な基準は、美しさや技術はもちろんですが、自然博物館の作品コンクールということで「植物の持つ形や色を上手に生かす」「できるだけ身近な野草を使う」「希少なものは使わない」等も審査の観点としています。

今回の作品が大変素晴らしい来館者の評判が良かったため、平成8年度も第2回目の押し花絵画コンクールを開催する予定です。四季折々の押し花を準備され、是非ご参加下さい。

観察の記録

一野外の広場から一 教育課 早瀬 長利

野外には、水辺の動・植物の観察エリアとして、トンボの池があります。そこは、魚類やカメを放したり、水草を移植したりしながら、徐々に様々な生物が生息できる自然環境を復元しつつあります。その環境変化を敏感に水鳥が感じとり、現在、カワセミやコサギ、ゴイサギがエサ場として活用しています。また、カルガモは昨年の11月3日に3羽が飛来して以来、館では人工筏の休息場所を作ったり、静かに観察していただくように来館者の皆様に協力をお願いしました。それから数が増えづづけ、2月までに30数羽がおとずれるようになりました。



インフォメーション(4~6月の行事)

自然教室(定員40名)

4月7日(日)10:30~(博物館8:30出発)

『海藻を観察しよう』(ひたちなか市)

5月11日(土)10:00~(受付9:30~)

『沼にすむけものたち』

6月8日(土)10:00~(受付9:30~)

『園内の昆虫を調べよう』

※ [小中学生が対象です]

自然講座(定員40名)

4月7日(日)13:00~(受付12:30~)

『ヒヌマイントンボ発見にまつわる話』

5月5日(日)・12日(日)13:00~(受付12:30~)

『押し花の絵画製作』(2週連続で参加できる方)

6月2日(日)13:00~(受付12:30~)

『顕微鏡で見る鉱物の世界』

※ [高校生以上を対象としています]

自然観察会(定員40名)

4月28日(日)10:00~

『春植物の観察』(筑波山)

集合 筑波山神社(10:00)

5月26日(日)10:00~

『花園渓谷の自然と岩石』(北茨城市)

集合 花園神社バス停前駐車場(10:00)

6月2日(日)8:30~

『磯の動物の観察』(ひたちなか市)

集合 大洗水族館駐車場(8:30)

※ [どなたでも参加できます]

[各講座等への申込方法]

事前に電話で申込願います。

ミュージアムパーク 茨城県自然博物館

☎0297-38-2000 内線413

サンダー・サイエンス

【楽しい体験教室】

月ごとにいろいろなテーマで、毎週日曜日にディスカバリー・プレイス内のスタジールームで実施しています。

観察や実験、工作などの体験をとおして、楽しみながら自然への関心を深める機会です。

テーマ 4月『野草で紙をつくってみよう』

5月『赤土の中の宝物』

6月『スケッチする昆虫も好き好き』

※スケッチコンクールを実施します。

時 間 午前の部 10:30~12:00

午後の部 14:00~15:30

受 付 開始時間の20分前から、スタジールームの前で行います。

えいが会(定員約300名)[講堂・映像ホール]

4月28日(日)『ジャングル大帝(進めレオ)』

5月5日(日)『ネバーエンディングストーリー』

6月16日(日)『セロ弾きのゴーシュ』

上映時間14:00~、入場無料

なんでも相談

自然についてわからないこと、ふしぎだな、と思っていることなど、なんでも気軽にご相談ください。

相談方法 博物館あてに質問を郵送するか、直接ご来館ください。

相談日 4月14日(日)

5月12日(日)

6月9日(日)

場所 ディスカバリー・プレイス観察カウンター
時 間 14:00~16:00

4月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

5月						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4		
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

6月						
日	月	火	水	木	金	土
	1					
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

[交通案内]



ご利用案内

[入館料]

区分	本館・野外施設	野外施設のみ
小・中学生	100円(50円)	50円(30円)
高校・大学生	300円(200円)	100円(50円)
大人	500円(400円)	200円(100円)

(注) ()内は団体料金(20人以上)

企画展開催期間中については別料金となります。

次の日の入館料は無料です。

● 3月20日(春分の日) ● 4月29日(みどりの日)

● 6月5日(環境の日) ● 11月13日(茨城県民の日)

午前9時30分から午後5時まで

(入館は午後4時30分まで)

● 毎週月曜日 (祝日の場合はその翌日)

● 12月27日から1月4日まで

[鉄道・バス]

(水戸・東京方面から常磐線利用の場合)

(東武野田線)	(茨城急行)	(徒歩)
JR柏駅 24分	愛宕駅 20分	自然博物館入口 10分
(常総線)	(関鉄バス)	(茨城急行) (徒歩)
JR取手駅 30分	水海道駅 20分	辺田三叉路 10分
		自然博物館入口 10分 (1時間10分)
(笠間・下館・結城方面から水戸線利用の場合)		
(常総線)	(関鉄バス)	(茨城急行) (徒歩)
JR下館駅 55分	水海道駅 20分	辺田三叉路 10分
		自然博物館入口 10分 (1時間35分)

皆様方のご期待に添えるよう精いっぱい努めて参りたいと思います。館職員一同、皆様のご来館をお待ちしております。(T.S.)

[編集後記]

平成7年度が慌ただしいまま「アッ」という間に過ぎてしまい、もうすぐ平成8年度が始まります。

新年度の行事も、自然と触れあう機会を少しでも多く設けようと計画しておりますので、皆様方もどんどんご参加いただければと思います。また、新年度も